悪魔。
人よりもはるかに強靭な肉体。
人よりも遥かに優れた魔法の力。
かのものがそれを選ぶのは当然の帰結である。
「ふはははは…成功したわ…」
イハビーラ＝メッコーは鏡を見る。その姿はいままでの青い髪の女性ではない。
金色の髪。花の髪飾りがアクセントになっている。
緑色のドレス。はだしの脚がまぶしく映る。
「ふむ…製作に時間を掛けた傑物なだけに…奇妙な高揚感があるな…」
イハビーラは鏡を見ながら制御および外面上での異常は無いか確認していく。
「よし。目に見える問題はなし、と」
イハビーラはそういうと背もたれ付きの椅子に座り込み、
「っーーーーーーーーー！！」
声にならない叫びを上げた。
「…羽か、この羽根が問題なのかっ！」
どうやら背もたれに羽根を挟んだらしい。
「く…しかし、物理無効を持たせたのに、痛みがくるとは…」
ＤＤＳを立ち上げ、自分のステータスを確認するイハビーラ。
「物理無効は保持しているな…ふうむ…」
やおら拳銃を取り出すイハビーラ。
「せえの…」
バン！
「…痛まん。どういうことだ？」
疑問に思うイハビーラ。
コンコン。
部屋のドアがノックされる。
「イハビーラ、入るわよ…あら、成功したのね」
「月瀬か。なんのようだ？」
開いたドアから姿を見せたのは妖艶な美女である。巫女服に装飾用の外套を身につけている。
「陽子から、ヨーロッパ発見の美術品関係の売却が終わったって。あと、シーネルからダマスカスからウィンドフルートの製造が完成。進水式をおこなったということ」
「そうか。では、そちらへ行こう」
イハビーラは部屋から廊下へ出ようとして、再びうずくまる。

「どうしたの？」
「羽根が…羽根がーっ！！」
「…ご愁傷様」
　結局のところ、イハビーラはこの日、後、５回ほど羽根をどこかにぶつける、もしくは、挟むという痛い体験をすることになるのであった。

SSFW Outside Story

新世紀アリス伝／Face Earth

Ep02.　季節はずれの恐ろしさ

アバンタイトル

　現在、イハビーラ＝メッコーの配下にいるのは月瀬寧々、古宮陽子、土岐遙、そして…Ａ１とイハビーラは呼ぶ古宮由女(戸籍上ではそうなっている)の４人に加え、ウィミィニホン駐留軍の一部ということになる。
　いや、正確にいえば、那古教聖女たちがウィミィ軍に入った、というのが正しい。
　もともとは敵対していたのだが、時空融合後はイハビーラがＤＤＳを手に入れたこととお互いの事情と利害関係が一致し、いくつかのルールの元での共同生活を送っている。
　一つ目はイハビーラは由女に対しなんら手を出さない事。
　イハビーラは当初は渋っていたがＤＤＳの研究がすすむにつれ、由女と同じような能力のものを簡単に作れることが判明してからは必要性が減衰したため、この提案を飲むに至る。
　２つめはイハビーラの研究の実験に付き合うこと。
　これにかんしては実験の助手であって実験素材になることではないことが付属で明記されている。

イハビーラはこれでＤＤＳの実験における「実行犯」を確保できた事になる。
３つめは現、日本連合には当面非協力でいくことを上げている。
これは陽子・寧々・イハビーラの３人の前歴によるものである。イハビーラは人体実験を平気で行なってたし、寧々や陽子も軽犯罪(窃盗や詐欺)の常習犯でもあったうえにあまり人前でいえないことも多い事に起因する。
たぶん、寧々と陽子については無罪放免（元の世界の特殊性に付き）になるだろうと予測されるが、協力体制をとるには由女の存在がもうひとつの足かせになっていることも事実である。
正直な話、３人ともに政府を信用しきれないという判断に他ならない。
加持総理の人柄から「表向き」は由女（Ａ１）については保全を受けるだろうが、末端の暴走は避けられないだろうというのが本音である。
イハビーラは自分の作品を他人の実験材料になるのは腹立たしいことと思ってるし、他のメンバーにいたっては「守るべき人」なのだから論外である。
４つ目。月１００万の給料を最低ラインに。
まあ、生活費うんぬんということである。
イハビーラはこれはすぐに承諾した。なにせ、ウィミィ軍の誰よりも有能なのだから。というか、費用対効果からおつりがでると判断しての事。

では現ウィミィ軍の収入源はなにか。
一つ目はエマーン＝ヨーロッパ領から美術品を回収するという大技である。
存在力の強さでいうなれば超一級の美術品もそういう点では同じである。ならば捜してみる価値はあるだろう、ということで陽子と由女の二人を中心にヨーロッパ派遣を計画。多くの美術品をサルベージしたのである。
絵画などは雨などに濡れて見るも無残なものになっているというのが大半だったが、腕のいいキュレーターを紹介してもらったこともあり(ギャラリーフェイクの彼である――彼はこの仕事で狂喜乱舞していたが)なかなかの収入になっている。
つづいては強化装甲兵に加え豆戦車も保有していたことから研究組織に提供している。日本向け…というよりはアメリカの方で研究が進んでいる。ウィミィはもともとアメリカだから、システムが似通っている部分が多かったのである。大戦中の生産とは思えないハイレベルな技術にアメリカの関係者は一様に驚いていた。
この強化装甲兵の特許はイハビーラの名ですでに申請済み。そして０２年の頭にアメリカでの特許が降りている。
もっともイハビーラが純正のアメリカ人で無いことにくわえ、他の軍需産業

各社からの有形無形の有害工作によって生産は遅延しているが、全く生産されていないわけではなく、生産された分についてはきちんと納入、代金の払込をしっかり受けていた。
　まあ、冶金分野においては大戦時期のものであり、実弾防御能力では大きく劣っていた。だが、ムーの散発的な侵攻においては(旧式装甲でも)歩兵で運用可能な装甲兵器であり、前面装甲においてはレーザーの直射に３秒ほど耐え切れる性能を見せている。つまり、実弾防御性能は低かったが耐熱／対光学防御面では実は優秀だったのである。
　ちなみに僅か３秒と思われるが、レーザーは一点に熱量を集中させて切るという兵器の性質上、ランダム機動運用を行なえば長時間持つ事が可能なのだ。ウィミィ軍の兵器が熱源兵器（レーザー、ビーム、火炎放射器などなど）が中心な上、士官が女性優先のため、居住性…まあ、ぶっちゃけ放熱／冷却関係…が充実していたのが幸いし、格闘戦やミサイル攻撃を受けなければ実用には問題はなかったのだ。そして格闘戦をもともと挑もうとする兵士はいなかったし、ミサイルに関しては防衛用の兵装を装備すれば(それこそシェルツェン――すこしはなれた位置に鉄板を一枚取り付ける――でも効果はある)よかったのである。
　さらに付け加えれば。現行のアメリカ軍の装甲であっても、ムーのレーザーにたいしては瞬間で撃ちぬかれるのだから、けっして古い冶金学の産物といっても馬鹿にしてはいけない。
　とはいえ、出自の時代が大戦中～大戦終了して間もない頃のものなので、軍上層部からは旧式と呼ばれつづける。
　ちなみにこの旧式と上層部で呼ばれた兵器ではあるが、前線では恐るべき事に１機＋１個小隊の兵士が３０体のムーのロボットを片付けた猛者たちもいた。
　このような猛者のような彼らは当然のように、そして前線からはときには戦車よりも配備の要望があったのだ。
　結局のところ目の前にムー戦線において非常に重要な兵器が手元にあったにもかかわらず、偏見と軍需産業各社と政府の癒着構造から無視されたのである。
　もし、彼ら――アメリカの首脳部――にこの現状を指摘する場合、なかなかいい台詞がある。
　「お前らはナチスと同じ二の徹を思いっきり、踏んでるぞ。」

　閑話休題。
　こういったウィミィ軍の遺産を切り売りして得た金はそのまま月瀬寧々（ちなみに夫に島本純がいたりするが）の手に委ねられ、様々な取引…株式、先物、様々なもので…数十倍の額面になっていた。余談だが、寧々は収益の１割ほどを給料に上乗せしてもらっているし、自分の資産もどうように１０倍以上に膨

れ上げている。
　こういった取引で得た資金でイハビーラはある企画をダマスカスに提案し、そして…その結果がインド洋沖にて完成したのである。それが先ほどの一件の話にでてきたものである。
　船名「ウィンドフルート」。
　「ふわふわ」でできた「空母」である。
　内部にふわふわ製造装備を搭載。航海中でも簡単に補修可能という素晴らしい性能を見せる。
　サイズは全長５０ｋｍ、全幅３０ｋｍ、全高１２００ｍ。地平線ならぬ船平線が見えるという素晴らしいサイズである。なお、重要部分――ジェネレイターや駆動装置――には厚さ２０ｍという複合装甲を採用している。ちなみに戦艦大和でも装甲厚の単位がｍになることはない。
　不沈空母の名に相応しいものになっている。もっとも漂流する可能性はあるが。
　空母に用いる戦力にはイハビーラの生物改造技術の最高の産物――というか、ＤＤＳの運用実験の場として選んだ場所から「発掘」した生物――を用いたものになっている。
　発見した場所は喀什（カシュガル）。その生物の総称呼称は…ＢＥＴＡ。
　生物らしいが、どんなものでも廃墟にし、何も無い荒野へと変えて行くその性質を始めとして、生態そのものは殆どが不明のままである。
　このＢＥＴＡを語る上で一番重要なのはとてつもない出力のレーザー発信機を生物搭載している上に地平線／水平線に航空機が見えたとたんに撃墜できるという超高性能狙撃能力をもつことである。
　まあ、イハビーラは得意の洗脳技術を用いてこのＢＥＴＡを管理できるようになったのだが…。空母にくせに載せているのは最強の対空生物で、そのおかげで航空機が発進できないというオチがついている（航空機への狙撃はどうも本能の中でも相当に強い本能らしい）。
　まあ、まだ搭載すべき航空機が決まっていないためそれでいい…というのがイハビーラの答えであるし、ＢＥＴＡも普段は厚い装甲の内側に収納しておけば（つまりは狙撃できない位置に置いておけば）何ら問題はないためダマスカスでもＧＯサインがでたのである。

　まあ、欠点を付け加えるなら…でかすぎてすぐに各国のしるところになったのだが。

Date. 02. 05 / 04

「アメリカ空軍か。」
　イハビーラは艦橋から外の様子を見ていた。
　U.S.の名がついているヘリが近づいている。このウィンドフルートが進水してから「没収」しようとアメリカ軍が来たのである。
　ちなみにイハビーラはアメリカ空軍といったが海軍である。
「さて、それでは…ＢＥＴＡの性能を見せてやるか？」
　イハビーラはダマスカスからのオブザーバー、李純麗に声を掛ける。
「構いませんが…行なうなら相手に通信をさせないように」
「純麗くん…ふむ。そうだな。」
　イハビーラは羽根を震わせて振り返る。
「切り札になるものだからな。ここは全個体による一斉攻撃で終わらせるか」
　イハビーラはひとつのコマンドを入力する。甲板に１８ｍサイズの怪獣といってよい姿が現れる。瞬間、僅かに世界が瞬く。

「…先遣部隊信号途絶。…後方に位置していた支援部隊もロストしました！」
「なに？」
　アメリカ軍インド洋艦隊の空母。
「…この大型ユニットをこれより敵性艦と判断。対艦攻撃機を出せ！」
　空母から次々と発艦するＦ／Ａ－１８ホーネット。だが…次々と撃ち落されるのを目撃することになる。
「なにが起きた！」
「わかりません！！　…が、なんらかの対空攻撃を受けているのでは？」
「なにをいうか！この距離だぞ！？」
　結局対艦攻撃用装備を施された航空機は全て撃ち落されたのである。
　ここで攻撃を中止する。というより中止せざる終えなくなったのだ。なぜなら、もう艦載機がないのである。
「提督。分析の結果なんですが…」
「なんだ」
「我軍の航空機はすべて相手と直線で一切遮蔽が入らないと撃墜されています。つまり…光学兵器による狙撃を受けている、と見るべきです。」
「なにをいうか…そんな出力の光学兵器なぞ、あるものか！」
　だいたい航空機はもともと最高速度をだしたときの摩擦熱に負けないように設計されている。そのいっぽうで外の気温はマイナス域のものには間違いない。

結局のところ光学兵器は航空機を狙うには元々向いていないのである。長時間の照射を必要とする上、放熱能力が陸上兵器と比べると桁外れ。しかも高度の分、空気遮蔽が入る。威力自体も落ちるのだ。
　まあ、空気遮蔽を通り越した上で相手の熱許容量を一気にぶち抜くだけの出力があれば別。穴の開き方（この場合は裂け方）によっては空気の壁によって空中分解を望めるし、燃料ラインを撃ち抜けば高確率で炎上するからだ。音速にたっしたがゆえにこういう惨事は起こりやすい（もっとも音速をこえると砲身を固定したまま照射しても効果はもっと望めないものになるが）。
　本来レーザーとはかくも役にたたないものである。

　と、いうか役にたつのなら今の世の中光学兵器で十分なはずなのだが。
　このへんは日本海軍でも近接防御にしか光学兵器が使われていないことからも想像できるだろう…。

「提督、そういうことをいえば、あのムーは一体なんなのですか。エマーンのハウスはどうなんです？」
「む…わかった。あれは異世界のものだということか」
「そうです。われわれの考えの埒外のものです。」
「ならばなおさら我々アメリカのものにせんとな…。全艦に伝えろ。艦船による攻撃に切り替える。相手はマイル単位の化け物だ。がんがん撃ちこめ！」
　ミサイルによる攻撃に変更するように伝えられた。

「…これはミサイルか。ＢＥＴＡ収容。ふわふわスモーク展開。対ミサイル防御だ。」
　ウィンドフルートの甲板が剥離し、ふわふわケーキが浮く。そこへ対艦ミサイルが直撃してゆく。
　大きな大輪の爆炎が次々と空中で放たれる。
「ところでイハビーラ。このあとはどうするつもり？」
「ん？ああ、あの艦隊はもうじき終わる。ＤＤＳ機動。サモンデビルス」
　イハビーラの声とともに３００を超える悪魔達が現れる。
　これに純麗は驚く。
「ダマスカスでもＤＤＳを扱う人物は幾人かいましたが…まさかこれほどまでの数を使役できる人物がいるとは…」
「まさか。この船にはウィミィ軍の兵士が乗っている。それにＤＤＳを渡しているにすぎん。ＤＤＳも人間の戦争と同じだ。数と性能と――運用法で決まる。」
　イハビーラの声により悪魔達が水の中へ潜っていく。なかには大型の魚類を

思わせる個体の口の中にはいっていく。
「あのあたりの小鬼などは？」
「ん。ああ、あれか。」
　イハビーラはちらと純麗の顔をうかがい、そして口をひらいた。
「ま、念のためだな」
　イハビーラはそれだけを告げる。
　ミサイルの攻撃は次々と打ち込まれてくる。中にはウィンドフルートに直撃したものもあったが分厚いふわふわの前には無力であった。
「ふわふわだけでも１００mはゆうにあるからな。並の対艦攻撃ではびくともせん。」
「サイズもありますしね」
　純麗も流石に感心する。このウィンドフルートを落すには多分――核もしくはそれに相応するものでないと不可能と判断した。

「対艦攻撃ですが、なんらかの妨害手段により敵艦に直撃せず爆散したものが８割。残り２割は着弾を観測しましたが…」
「全艦攻撃で４００発のうち８０発だ。それなりに効果があっただろう。」
「ですが、サイズがサイズです。どうでしょうかね？」
　と副官が答える。
　がくんと船が止まった。
「ん、どうした？」
「…主機関がいきなり停止しました！」
「なんだとう！？」
「駆逐艦サッチャーから入電、ワレ、シュキカンボウソウ」
　その入電を報告した直後、空母のとなりのイージス巡洋艦がいきなり対空砲撃を開始した。
「なんだ！？　敵か？」
「違います、いきなり防空システムが故障したと通信が――」
　今度は轟音。
「なんだ！？」
「同士討ちです！」
「なに！？」
「駆逐艦サッチャーが対艦ミサイルを僚艦にむけて…」
　ガウン。
　提督は何が起こったかわからないままに吹き飛んだ。
　駆逐艦、艦名サッチャーは次の対艦ミサイルを発射。それが空母の艦橋を吹

き飛ばしたのだった。
　指揮系統の混乱は避けられないうえ、主機関を始めとしてさまざまなシステムが異常をおこしたのだった。そして…彼らは悪魔達に襲われたのである。

「…敵艦制圧完了。ウィンドフルートを接舷させ、拿捕しろ。」
　イハビーラは満足げに部下からの報告を受けた。
「どうですかな。我ら新生ウィミィ軍の実力の程は。」
「流石です。…もっともいくつか対艦ミサイルが直撃したもようですが。」
「被害報告の詳細次第もあるが、まあ、あの程度の威力のものなら大して恐れるほどのものではない。もう少しＢＥＴＡの頭数を増やせれば迎撃が可能になる。現在の３０匹では航空機の迎撃が限度だ。それに外装も完全に整っていないからな。」
　表面剥離によるミサイル防御はあくまで臨時措置のものでしかない。
「これだけ広大な甲板だ。対ミサイル防御用装備の車両を搭載すればよかろう。」
「車両…ですか？」
「うむ。柔軟な運用が行なえるだろう？これだけのサイズになれば敵は一点集中でまずは大穴をあけることを狙うか…まあ、全体を均等に狙ってくるだろう。固定砲台だと一点集中を受けたときに対処しきれないが、車両で運用すれば、周辺からかき集める事で防御システムを密にできる。損害を受けた結果の穴を埋める事も可能だ。」
「なるほど…しかしそれに乗り込む兵の士気はあまりあがらないのでは？」
「このへんは私の腹心の部下に妙案がある。…ＯＫＥというものを使用することだそうだ。」
「ＯＫＥ？」
「ＤＤＳの運用についてのノウハウとともに、新生ウィミィ軍の重要機密に属するのでダマスカスにはまだ秘密だ。」
「…では最後のＤＤＳによる攻撃部分の報告はいただけないということですか？」
「そういうことになるが…ま、簡単なものならよかろう。寧々。報告書を早急につくりあげてくれ。」
　艦橋の隅で静かに佇んでいた寧々はひとつ頷くとノートパソコンに打ち込みを始めたのだった。

　翌日。李純麗は飛空船でウィンドフルートから離れていった。
「では、月瀬寧々。我々も日本へ帰るぞ。」

「あら…このままいつくのではなくて？」
「このような木偶の船にか？」
　イハビーラの言葉には自分の提案によって出来た船だというのになんの感情もこもっていない。否、こもっているとすれば侮蔑。
「そうかしら？　なかなかのものだと思うわよ？」
「どのみち、これはあと２、３年でその必要性を失う。そのころには日本連合であってもこの手の船を大量生産するだろう。ＢＥＴＡはともかく、それ以外は発想の違いであって、技術的格差によるものではない。」
「そう？　あのＢＥＴＡは？」
「あれはもう少し一考の余地がある。現用では大きすぎる上に扱いが難しい。元々サンプル――あの対空狙撃能力をコピーできれば処分したほうがいいだろう――だからな。」
「それ、ここに置いて行っていいの？」
「かまわん。ウィンドフルートの艦長は…シーネルでかまわんか。無能だが…人の上に立つ実務能力が皆無というわけではないからな。」
　イハビーラの答えに頷く寧々。ウィミィ軍は基本的に人材不足なのである。とくに人の上にたつ人間にいたってはウィミィ軍属ではイハビーラとシーネルの二人だけでしかない。マリーという元下士官に目をつけているものの、今現在は教育中というのが実情である。
「さて…大鵬を呼ぶが、準備はいいか？」
「着替えてきましょう」
　寧々はそういうと一度、更衣室に戻るのであった。